

児童らが 森づくり

内子の立川小

育てた木で卒業証書を

内子町の山あいにある町立立川小学校(菊地利邦校長、83人)の児童たちが、校庭の裏山に季節の花が咲き果実がみのある森を育てている。「教育の森」という名前をつけ、1年前に数百本の花や木を植えた。先月にはブルーベリーが初めて実をつけた。ミツマタが大きくならしたら和紙をすき、卒業証書をつくる計画もある。

同校は、町の中心部から5・6キロ北に向かった山あいにある。教育の森があるのは、2年前に改修した木造校舎の裏手。地元の人が山の一部(約1500平方メートル)を譲り受け、孟宗竹を伐採した跡地につくった。

元の人から山の一部(約1500平方メートル)を譲り受け、孟宗竹を伐採した跡地につくった。ブルーベリーやクマシ、ミツマタ、スイセンなどの苗木や球根を植えたのは昨年11月。「地域社会とのかかわりを深めるきっかけになれば」(岡町教委)と、保護者や地域の人たちも加わって作業を手伝った。

この春、20センチほどの大きさのタケノコが順を出した。児童たちは早速掘り起こし、町内にある「道の駅」の直売所で1本400円で売った。70センチのタケノコに今度は800円の値をつける。売れ残るといふ失敗も経験した。「大きいのは高い値では売れない」ということを、直売店の人から教えてもらった。

同じころ、花が咲く森で自然観察会や写生会を開いた。

自然観察や販売体験も

9月、ブルーベリーが果実をつけ始めた。今年はまだ少ないが、来年にたくさん実ったら、学校でジャムをつくるという。

ミツマタの木はまだ、大人のひざの高さくらいしかないが、繊維がとれるまで大きくなったら、和紙をすく予定だ。学校側は「1、2年後にすいた紙で卒業証書をつくるのが目標」という。

だが下草刈りなど、森の管理には思った以上に手間がかかる。水泳大会や運動会など学校行事が集中する時期にとりやうって、時間を削くかが悩んだ。

菊地利邦校長は「先生は転勤もあるし、管理は大変。でもなんとか、学校と地域が一緒になって森をつくる形をつくりたい」と話す。



「教育の森」に生えるミツマタ。菊地利邦校長は「卒業証書をつくるのが目標」という。内子町の立川小学校で。